

## 牛を描いて六十有余年 奥村土牛の宇宙的画境

奥村土牛といえば、押しも押されもせぬ昭和画壇の大御所。ゆつたりとしたおらかな画風に、ますます高雅と清明の風格を加えている。

画号にふさわしく、牛を描いて六十有余年。昭和五十九年秋に院展に出品した「犢」は、円熟の言葉がぴったりの名品で、九十六歳という年齢がうそのような確かな筆づかいを見せつけた。

明治二十二年、東京の京橋に生まれ、本名は義三。小林古徑に師事したが、その画号のように世に出るのが遅かった。

が、どんな貧乏のときでも、王侯貴族のような気持ちを持ち続けたといい、土牛の画境を支える調子の高さはここに由来する。世に出るのが遅かったのと、子だくさんであったため、家計はかなり苦しかった。しかし、いうところの生活のための「売り絵」は決してしなかったため、画商たちの間では「土牛百遍」（土牛を口説くには百遍かかる）という言葉さえ生まれた。

代表作の「鳴門」は、鳴門の観潮船の上で身を乗り出してスケッチするのを、夫人が後ろから必死になつてつかまえていたという美談調のエピソードつき。牛の絵としては、



大正十一年の「仔牛」、昭和十四年の「八瀬の牛」、昭和二十八年の「聖牛」などが有名。土牛の号は、土牛が明治二十二年の丑年生まれであったところから、二十八歳の年にスケッチ集を出版した際、父親がつけてくれたものという。

有名な「寒山拾得」に「土牛、石田を耕す」というのがあり、牛が石ころの多い荒地を根気よく耕すように、お前もたゆまず精進せよとの意がこめられているという。それといまひとつ。中国では、むかし、大寒の日の前夜、疫病を払うために宮城の門口に土で作った牛の像を建てた。

この故事から、のちには春祭の際にその年の豊作を祈って飾るようになり、これは別名「春牛」とも呼ばれた。いずれにしても、九十六歳にしますます冴える画境は、悪魔をまったく寄せつけぬ清明そのものの地を独歩するおもむきである。

土牛のいま一人の師である横山大観は、

「山水を描いても、花鳥を描いても、その奥に宇宙が描けなかつたら芸術とはいえない」

といったとか。土牛の牛の絵に宇宙を感じるかどうかは、もちろん見る人の能力にもよる。